



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	自然観と野外活動に関する一考察
Author(s)	束原, 昌郎
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 5 部門 , 芸術・体育, 36: 175-182
Issue Date	1984-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/12106
Publisher	
Rights	

自然観と野外活動に関する一考察

東原昌郎

保健体育学

(1984年6月11日受理)

1. はじめに

自然に対する態度を決定する要素のひとつに自然観が考えられ、その如何は自然の状態を左右するものと考えられる。

我が国の自然が現在その保護保全のかけ声とはうらはらに距離的に遠く量的に少なくまた質的に悪化している現実、高度な科学教育をほどこされている日本人の自然観に何か欠けているのではないかと疑いを抱かせる。

自然が人間の生活の基盤であって自然なくして人間が生存できないものである以上、現在の自然の窮状を招いた自然観に不備があればそれを補い、より適切な自然観形成の方法が模索される必要がある。

このような観点から、自然観の類型と構造およびその形成の過程について調べ、自然を背景に営まれる野外活動とのかかわりについて考察したい。

2. 自然観

自然のとらえ方、自然に対する認識のし方を自然観といい、自然の語義として国語辞典にはおおよそ次のように示されている。「一(名・形動)①人工の加わらない本来の状態。②人力で左右し得ない状態。③造化の作用。④本性。天性。⑤〔哲〕認識の対象となるいっさいの外界の現象。⑥精神以外の客体。二(副)①万一。②おのずから。ひとりでに¹⁾。

自然とはもともと漢語であり、老子は「究極の實在」という意味で、「人法地 地法天 天法道 道法自然」のように用いた²⁾。

西周は明治6年に「生性発蘊」で英語の Nature の訳語として自然を用いている³⁾。

また、Nature の訳語として英語辞典にはおおよそ次のように示されている。n ①自然; (しばしば N一)(擬人的)造物主 ②自然界, 自然現象 ③原始状態 ④〔人・動物の〕天性, 性質; ……の性質の人 ⑤〔事物の〕性質, 特質, 種類; ……⁴⁾。

このように自然とは多義なことばであり、したがって自然観についても明確で普遍的な観念が確立されている訳ではない⁵⁾。

野外活動との関連において自然観を考えるにあたって、このような広汎な自然のそれぞれを対象にすることの必要は感じられるが、ここでは野外活動が最も直接的にかかわりをもつ自然、すなわち野外活動の舞台となる自然に限って考察する。

野外活動の舞台となる自然とは、中国では天地、我が国では山川草木、天地山川、あるいは国土山川草木、のように表現されてきた自然である⁶⁾⁷⁾⁸⁾。

考察の対象をこのように限定しても、例えば中村⁹⁾がその見方として、資源としての自然、風土としての自然、実態のない自然、神としての自然、バランスとしての自然、環境としての自然、を挙げているように、観点が多様であることは変らない。

これらの様々な自然に対する認識のし方は、人間を自然の一部とみなすか、あるいは人間と自然とを個々独立のものとしてみなすかによって二つのタイプに大別することができる¹⁰⁾。

洋の東西を問わず、古くは前者が普遍的であったが、風土、宗教、民族、等によって変遷の歴史は異り、前者は特に我が国において顕著な日本的あるいは東洋的自然観として、後者は特にキリスト教世界において顕著な西洋的自然観としてそれぞれ定着した。

気候、地形、地理、地味、等の、その地域の総合的状態である風土を、住民の生活様式や国民性、民族性と短絡的に結びつけることには因果論的飛躍があるにしても¹¹⁾、何世紀にもわたる日々の生活の場が全く影響を与えていないと考えることはできない。

日本の自然観の対象である我が国の風土と、西洋的自然観の母体であるキリスト教発祥の地の風土とは多くの点で際立った対照をみせ、またそれらは二つの自然観における対照にほぼ対応するものである。

3. 西洋的自然観

西洋的自然観は、無生物に靈の存在を考えるアニミズムにその原点が求められ、古代ギリシャに至っては万物に靈のみならず生命の存在をも考える物活論的自然観へと進み、そこでは神も人間もそのような有機的自然の一部とみなされた¹²⁾¹³⁾。

このような汎自然主義的自然観は、人間も自然も神という造物主によって創造された創造物であり、人間は神の息を吹き込まれた唯一の創造物であるが故に自然に対して優位に位置するとしたキリスト教の教義によって否定された¹⁴⁾¹⁵⁾。

人間と自然とを神によって創られた別個の存在とみるキリスト教的自然観は、後にダーウィンの進化論によって強い衝撃を受けるものではあったが¹⁶⁾、人間を自然から引き離し客体視した点において画期的であり、自然科学的自然観の萌芽ともいえるものである¹⁷⁾。

辻によれば¹⁸⁾、キリスト教が発祥した地域は風土類型上砂漠型に属し、そこでは乾燥風土条件のために住民に思想の乾燥性、意志の強固、道徳性の強烈、感情生活の空虚、等の特性がみられる。

また鈴木によれば¹⁹⁾、砂漠型思考類型は上から下を見る姿勢であり、有限、見通しの良さ、決断、総合的態度、等の特性をもち、その典型はユダヤ教やキリスト教的思考である。

単調で荒涼とした砂漠型風土に生きる民族が、その厳しい自然条件下での生存のために自然を冷静にみつめ、人間と自然とを分離したのは必然の結果であったと考えられる。

キリスト教における自然の客体視は、自然の法則性を把握することによって、自然を人間の生存のために制御し支配し利用しようとする自然科学的自然観へと発展し、キリスト教の伝播とともに広く西洋世界に普及した。

このような、自然は人間のために利用されるべき存在とみなす西洋的自然観の根底にある意識は、キリスト教の教義にみられる人間の自然に対する優越の意識であるということが出来る。

4. 日本人の伝統的自然観

明治初期に西洋哲学が紹介されるにあたって Nature の訳語として自然という漢語が用いられ

ねばならなかったことは、従来我が国には西洋的自然観にみられる、自然科学の対象としてのすなわち物としての自然の観念が十分に育っていなかったことを示している。

深沢によれば²⁰⁾、それは日本人が自然に対して無関心であったからではなく、自然と生活、自然と芸術が一体であったため、自然を客体として人間の外において見つめることがなかったからである。

このように、日本人の生活活動と精神活動が密着した自然を寺田は次のように描写している²¹⁾。「日本の自然界は気候学的地形学的生物学的その他あらゆる方面から見ても時間的に空間的に極めて多様多彩な分化のあらゆる段階を具備し、そうした多彩の要素のスペクトルが、凡そ考え得るべき多種多様な結合をなして我が邦土を彩どって居り、しかもその色彩は時々刻々に変化して自然の舞台を絶え間なく活動させているのである。」

辻によれば²²⁾、我が国の国土は風土類型上季節風型に属し、その最大の特徴は暑熱と湿気の結合で、その地域の住民は自然への対抗をせず、湿潤を自然の恩恵や暴力と受け止め、受容、忍従の姿勢をとる、等の特性がみられる。

また鈴木によれば²³⁾、森林型思考類型は下から上を見る姿勢であり、永遠、見通しの悪さ、慎重、専門家の態度、等の、砂漠型とは対照的な特性をもち、その典型はバラモン教や仏教的思考である。

このような特性と寺田によって表現されたような多彩な自然との合作になる自然観は我が国に固有のものであり、その変遷の過程は日本の伝統的芸術特に文学によって辿ることができる。

西村によれば²⁴⁾、日本人の自然観の芽生えは上代の記紀神話にみられ、万葉集では既に、自然と人間は融和的で一体化しているとみる融和的自然観、自然は恐るべき力をもつ神秘的なものとする神秘的な自然観、自然を美の対象とみる美的自然観、人間の生命がはかない存在であるのに対し自然の生命は悠久不変のものとする対照的自然観の他に、自然は神や人間とは別個の存在とみる客観的自然観の萌芽さえ認められる。

中古に入って古今集では、自然に対する融和的態度、審美的態度がますます強まると同時に対照的自然観が募り、源氏物語、枕草紙では四季の変化に対する感覚すなわち季節感が鋭敏になっている。

中世では貴族から武家への支配階級の交替という社会変動や、地震、風水害などの天変地異によって深い無常観にとらわれ、方丈記や平家物語では、武士や僧侶による、わび、さび、かれ、のような、自然の優美よりもきびしさ、はげしさ、簡素さに注目しそれに調和しようとする調和的自然観がみられる。

近世以降は既成の伝統的自然観と新しい自然観の並存の時代であり、特に近世後期には西洋科学思想の輸入によって、蘭学事始にみられるような、自然を客観的存在としてみる科学的自然観の占める割合も増えた。

以上のように、日本人の自然観は上代から近世にかけての比較的短い時間にも様々な変容を重ねたが、近代に入って西洋的自然観の吸収が活発になるまでの伝統的自然観にみられる優勢な傾向は、おおむね人間を自然の一部とみなし、自然は人間が融け込むところ、人間と自然とは自他未分、主客合一の存在とみる²⁵⁾、いわゆる非科学的自然観であった。

日本人にこのような自然観を生ぜしめた自然は気候学的地形学的生物学的に多様性を備えた自然であったが、それは、時には豊かな恵みをもたらし人間を優しく抱き込む柔和な慈母であり、また時には人間を冷淡に突き離し凶暴な素振りさえみせて鞭打つ厳父でもあった。

慈母であり厳父でもある自然は人間にとって神秘的かつ威力的な存在であり、日本人の生活の安寧は慈母の慈愛に甘え厳父の厳訓に服することによって保証されるものであった²⁶⁾。

すなわち、日本人の伝統的自然観の根底には、自然に対する甘えと畏れの意識があったもの
と考えることができる。

5. 日本人の現代的自然観

日本人の伝統的自然観は、単一民族といわれる程の民族的閉鎖性を保ち、風土的特質も変ら
ず、伝統的文化も捨て去られていない以上、それが今なお日本人の心に根強く宿っていること
は疑いのないところである。

しかしまた、西洋的自然観が導入されて既に1世紀以上の時間が過ぎ、科学技術を駆使する
ことによって自然を含む生活環境が変化し、人間の側でも世代の交替が行われていることから、
日本人の伝統的自然観と現代日本人の自然観との間に何らかの差異が生じているとみるのは不
自然なことではない。

西洋的自然観は日本人の伝統的自然観とは相容れない対照的なものであったが、日本人は非
常な順応性を示してこれを吸収し自然科学の技術を発達させた²⁷⁾。

明治以降の急速な近代化や戦後の高度経済成長下における大規模な国土の開発は、まさに科
学の力によるものである。

科学はしかし、それをを用いる人間の見識によって往々にして当初意図されたものとは異なる結
果を生む危険性をもつものである。

すなわち Passmore によれば²⁸⁾、第1に科学によって人間は人間の特性や人間の力や人間の
将来をあまりにも高く評価し過ぎ、第2に科学は人間と自然とをきわめて抽象的分析的に考察
するあまりそれらの複雑さから目をそらし、第3に数学的に正確な量的関係を強調するあまり
個性をおびやかす想像力を貧困にし、第4にこれらのことを行わせる感性の鈍さと政治的便宜
主義を客観性という仮面で覆ってしまう、等の危険性をもつものである。

このことを踏まえてふり返れば、これまでの我が国の科学は物質的生産性の向上にしのごを
削り、戦争による壊滅的打撃を受けてわずか4半世紀程の間にG N P世界第二位を誇るまでに
経済を成長させ、日本人の生活に便利と豊富と快適をもたらしたことによって、一応当初の意
図通りに働いたかのように思われる。

しかし、人間性の疎外要因として頻繁に指摘される、日常生活活動や生産活動の極端な機械
化や栄養の過誤による身体機能の低下、大規模開発や公害による自然の荒廃、マスメディアの
発達とコマーシャルイズムの跳梁による画一的な情報の氾濫、等々は、やはり科学によってもた
らされたものである。

特にここでの関心的である自然の破壊と汚染の諸相は、中村によれば²⁹⁾、第1に自然の構
造を破壊して秩序あるものを無秩序にしたこと、第2に自然を量的に小さくし切断して各地に
孤立させたこと、第3に自然を質的に単純なものに変え大面積にわたって均一化したこと、第
4に自然に毒素を流し込み毒化し汚染したこと、であり、これらは人間の生活権の主張とともに
増大する破壊と汚染であって、本来自然のもつ回復力によって調和がとれているべきもので
あるが、その回復が間に合わない速度で進行している。

近代化や高度経済成長を可能にした我が国の科学が日本人の生活を便利で豊富で快適なもの
にしたことは事実であるが、その過程で人間にとってかけがえのない多くのものが失われても
きているという現実には、日本人によって用いられた科学が、実は Passmore によって危惧され
る危険な科学であったことを示していよう。

西欧諸国で自然保護の思想が早くから芽生えたのは、西洋的自然観が、人間は自然の上に立

つものという明確な自覚のもとに、自然を利用するばかりではなくその結果に対して主体的な責任を感じてもいたためである³⁰⁾。

それに対して我が国の現代的自然観では、伝統的自然観において自然に対する責任を感じさせる機能を果していたであろう、あるいは少なくとも大規模な自然破壊の歯止めの機能はもっていたであろう自然に対する畏れの意識が弱められたために責任感が欠如してしまったものと考えられる。

言い換えれば、我が国の自然の荒廃は、伝統的自然観の根底にあった自然に対する甘えと畏れのうちの畏れの意識が、西洋的自然観の導入によってその根底にある自然に対する優越の意識と交替し、自然に対する甘えと優越の意識のみによって強大な力をもつ科学を用いた結果であろう。

すなわち、日本人の現代的自然観の根底には、自然に対する甘えと優越の意識が強く流れているということが出来る。

6. 自然観の形成

人間の周囲の自然界の事物に対する知的経験のもとになる材料は人間の五官を通じて供給され³¹⁾、五官を杜絶すると同時に人間はなくなり世界も消滅してしまう³²⁾。

自然観とは人間による自然に対する認識の仕方であるから、自然を感じる事がなければ自然観が形成されることはなく、したがって、自然観の形成はまず自然との直接的な接触を通じて五官によって自然を感じる事から始められる。

しかし、五官による自然の認識には、それによって得られたデータが数量的でないこと、個人個人によって差があること、および生理的・心理的効果の影響を受けやすいこと、等の非科学的傾向がある³³⁾。

この非科学的、感覚的な経験は、時々刻々に変化するという瞬間的性質をのり越えて、その背後にある本質的法則を把握することによって外界を再構成し科学的認識へと発展する³⁴⁾。

春雨、五月雨、しぐれ、梅雨、夕立、秋霖、霰、はしり、しゅん、等のことばにみられる自然に対する繊細な感覚は外国語で表現することが困難な感覚であり、したがって外国人にとっては理解することが困難な感覚である^{35) 36)}。

我が国の文化と深くかわりのあるこのような季節感、変化に富む自然を五官で鋭敏に感じる事によって発達した日本人特有の感覚のようであり、このことは我が国の伝統的自然観が自然に対する五官による非科学的な認識によって形成される部分が多いことを示している。

一方、自然科学の驚異的な発展を可能にした西洋的自然観は、このような五官による非科学的自然認識を、客観的に整理統合した結果の科学的自然認識によって形成されている部分が多いと考えられるが、科学的自然認識に至る前段階として非科学的すなわち五官による感覚的認識の段階を経ていることが看過されてはならない。

すなわち、我が国の伝統的非科学的自然観も西洋的科学的自然観も、それが形成される第1段階は五官による自然認識である。

7. 野外活動における自然観の形成

我が国の自然は科学技術の発達とともに大規模な開発や公害による汚染によって量的に減少し質的に悪化した時間的に遠い存在になりつつある。

特に都市の住民の中には自然から全く隔絶されて生活したり、間接的なコミュニケーションによってのみ自然とのかかわりをもつケースも増えてきている。

また仮に、都市空間において自然と直接に接触できるとしても、その自然は花壇、学校園、庭園、公園、植物園、等の、人工的操作が加えられた自然であって、ここで考察の対象としている天地国土山川草木的自然に比較して自然の程度が低いものである。

自然観の形成が自然を五官で直接体験することに始まるとすれば、このように自然の窮乏した状態は自然観を形成するための原初的体験の機会さえ与えられないか、あるいはその機会を著しく制約された日本人が増えていることを示している。

野外活動については現在広いコンセンサスが得られた明確な定義が確立しているものではないが、自然に対する知的、身体的、情緒的アプローチのすべてをそのカテゴリーに含ませ、すなわち自然を背景に展開される活動の総称であるとする見方が一般的である³⁷⁾。

いずれにしても、野外活動の成立条件の最も基本的なものは自然との接触であり、したがって野外活動は自然観形成のための基礎となる体験の場を提供するものといえることができる。

しかし、有効な予想や観察の観点を心得て科学的なものに成長してゆく自然観は、単に人間と自然とを待峙させることによって形成され得るものではない³⁸⁾。

科学の時代といわれる現代に生きる世代の自然観は、そのような感覚的な認識の段階を通過し、更に過去の記憶、経験、知識、等と比べて、より論理的な筋道をたて、より概念的一般的な因果律を発見し、自然の認識を拡大深化することによって³⁹⁾、科学的な自然観にまで発展しなければ十分なものということはいえない。

このような科学的自然観の形成に対して野外活動がなし得る援助には、野外活動の形態からみて限度があろうが、科学的自然認識はその前段階として非科学的認識を経てなされるものであり、そこに、自然観形成における野外活動の意義が見出されよう。

すなわち自然観形成における野外活動の最大の意義は、自然との直接的な接触によって、以後科学的認識にまで発展する可能性をもつ芽を発芽させ得る立場にあって、現在の我が国においては稀少な価値をもつものである、というところにある。

東京都内の小学校における宿泊を伴う野外活動についてのアンケート調査⁴⁰⁾では、実施者の目的として最も強く意識されているのは自然の直接体験による自然理解ではなく、集団生活による社会性の涵養であり、児童にみられた最も顕著な効果は自然愛護の精神の高揚ではなく集団生活にかかわる効果であった。

すなわち、野外活動の場以外でも追求し実現できるであろう目的と効果が上位に位置し、野外活動固有の自然にかかわる目的と効果が下位に位置している。

現在の我が国の自然の実態と、それにおよぼされた自然観の影響、更に自然観の形成過程と野外活動との関係を考える時、野外活動はその特性と立場を自覚し、それらを最大限活用し得る方向で実施されるべきであろう。

すなわち野外活動は、現在のわが国における貧困な自然の状態の意味を理解し、それを憂慮し、その破壊の進行を止め回復を計る効果をも期待されるものであれば、必然的過程である自然との接触において可能な限り人工的な要素を排除し、五官で生の自然を体験することを意図して行われるべきである。

8. ま と め

人間の生活の基盤である天地国土山川草木を意味する自然に対する自然観は、キリスト教の

影響を強く受けた西洋的自然観と多彩な自然に恵まれた我が国に固有の日本の自然観とに大別され、日本の自然観は更に伝統的自然観と現代的自然観とに分けることができる。

それぞれの自然観の根底にある意識は、西洋的自然観では自然に対する優越、伝統的自然観では甘えと畏れ、現代的自然観では甘えと優越であろうと考えられる。

これらの自然観の形成はいずれも五官で自然を感じることによって始められ、自然との直接的な接触が必要であるが、現代的自然観による科学の使用はその機会を減少させた。

自然を背景に展開される野外活動は自然観形成の最も原初的体験を提供し得るもので、自然の回復を期するにはその特性を自覚して運営されるべきである。

多彩な自然に密接にかかわりながら独自の文化を発達させてきた日本人が、西洋的自然観と自然科学を安易に無批判に受け入れたための自然の窮状を今自覚するのは遅過ぎる感があるが、自然の存亡は人間の存亡にかかわることであり、次代を担う若い世代を対象にした長期の展望に立った対策が必要である。

引用・参考文献

- 1) 明解国語辞典，三省堂，1967.
- 2) 碓井益雄，文化史の中の科学，彩流社，1981，p. 19.
- 3) *ibid.* 2.
- 4) *Essential English-Japanese Dictionary*，旺文社，1966.
- 5) 西村真一，「自然観の変容」信州大学教養学部自然保護講座(編)，読自然保護を考える，共立出版，1982，p. 223.
- 6) 辻 哲夫，日本の科学思想，第2版，中央公論社，1973，p. 169.
- 7) *ibid.* 2，pp. 18—19.
- 8) *ibid.* 5，p. 225.
- 9) 中村登流，「自然観を探る」信州大学教養学部自然保護講座(編)，自然保護を考える，共立出版，1982，pp. 333—41.
- 10) *ibid.* 2，pp. 14—15.
- 11) 今井省吾，「自然環境」望月 衛，大山 正(編)，環境心理学，朝倉書店，1982，pp. 110—14.
- 12) *ibid.* 2，p. 15.
- 13) 近藤精一，「自然科学史と発達段階」近藤精一，森 一夫(編)，理科教育の理論と展開，第一法規，1980，p. 31.
- 14) *ibid.* 2，p. 16.
- 15) 渡辺正雄，日本人と近代科学，岩波書店，1976，p. 170.
- 16) *ibid.* 15，p. 174.
- 17) *ibid.* 2，p. 17.
- 18) 辻 哲夫，風土—人間学的考察，*ibid.* 11，p. 110より引用.
- 19) 鈴木秀夫，森林の思考・砂漠の思考，*ibid.* 11，p. 110—11より引用.
- 20) *ibid.* 9，p. 355.
- 21) 寺田寅彦，寺田寅彦全集 文学編 第5巻，岩波書店，1950，p. 587.
- 22) *ibid.* 18.
- 23) *ibid.* 19.
- 24) *ibid.* 5，pp. 225—38.

- 25) 奥野建男, ふたつの自然, すばる, 1972, 真船和夫, 子どもの自然認識と科学教育, 青木書店, 1979, p. 48より引用.
- 26) *ibid.* 21.
- 27) *ibid.* 5, p. 238.
- 28) Passmore, J., 野田又夫, 岩坪紹夫訳, 科学と反科学, 紀伊國屋書店, 1981, pp. 85—86.
- 29) *ibid.* 5, pp. 279—81.
- 30) *ibid.* 15, p. 182.
- 31) 寺田寅彦, 寺田寅彦全集 文学編 第1巻, 岩波書店, 1936, p. 252.
- 32) 寺田寅彦, 寺田寅彦全集 文学編 第4巻, 岩波書店, 1950, p. 226.
- 33) *ibid.* 31, pp. 227—8.
- 34) 滝沢武久, 子どもの思考と認識, 童心社, 1977, p. 224.
- 35) *ibid.* 11, p. 110.
- 36) *ibid.* 21, p. 575, 591.
- 37) 新修体育大辞典, 不昧堂, 1976.
- 38) *ibid.* 13, p. 39.
- 39) *ibid.* 13, p. 30.
- 40) 大久保佳子, 都内小学校における宿泊を伴う野外活動に関する一考察, 東京学芸大学保健体育科卒業研究, 1982, p. 22, 47, 34, 62.

A Study of View of Nature and Outdoor Activities

Masao TSUKAHARA

Department of Health and Physical Education

Synopsis

The purpose of this study was to find the major types of the view of nature with which the contemporary Japanese concern, and to investigate the relationships between the view of nature and the outdoor activities.

As the result of the study, the author found that;

- (1) the view of nature can be classified into the three major types of European, Japanese traditional and Japanese contemporary.
- (2) the direct experience of nature is necessary to build up the each type of view of nature.
- (3) outdoor activities can offer the scarce opportunities for the direct experience of nature, and also for the building up the view of nature in the contemporary Japanese living in which nature is decreasing.